

「明治末期から大正初期 モンペの話」

\* 『ところ文庫18 常呂町の昔話2』から抜粋・編集

明治31年に岐阜県から移住・入植した藤橋ワキさん・久保田末乃さん・内藤タメさんの会話を编者／林不二夫さんがまとめたもの。会話には美濃弁が使われています。

当時、岐阜から裁縫習いにお寺まで通っていたが寒かったねえ。裁縫習いに行くといってもモンペも履かないし、着物は長いし、そろそろしているから雪で濡れてしまって、靴というのはなかったからボッコ靴（わら靴の意味と思われる）だったから、着物の裾は出ているし、何でモンペを履かなかったんじやろう。モンペを何で習わなかったんじやろう。私どこがモンペを履きしたのは、近くに竹中さんおあって、そこへ芥川さんのキヨノさんおあって、遊びにいった時に「なしてモンペを履かん」と聞かれて、「モンペなんて知らん」と言って、それから不格好なモンペだったが、その人に裁ち方を教えてもらって履きだした。だから最初は貴重品だった。うちではお爺さんか父親だけが馬に乗りたり、よそへ行く時に履いて、そのお古をお婆さんが履いて、薪切りだの馬糞を出したり仕事をする時に履いた。男の人もモンペを履いていた。最初は私たまであたらなかった。ちよっとも履いたことはあらせん。

大正年代になり、東北地方の人たちが入植してきてモンペ姿で仕事をしているのを見て、さっそくモンペの縫い方を教えてもらい、最初は男の人たちの外出用に、その後、女性が仕事に着るようになった。

モンペにもいくつかの形があり、山形県人の場合はもも引きモンペといわれ、裾が細いものだった。また、秋田県人の場合のモンペは裾が広がったと伝えられています。